

## 独立行政法人国立高等専門学校機構教職員退職手当規則

独立行政法人国立高等専門学校機構規則第17号

制定 平成16年4月1日

一部改正 平成18年4月4日

一部改正 平成19年3月30日

一部改正 平成21年3月24日

一部改正 平成21年6月1日

### (目的)

**第1条** この規則は、独立行政法人通則法（平成11年法律第103号。（以下「通則法」という。）第63条第2項の規定並びに独立行政法人国立高等専門学校機構教職員就業規則（以下「教職員就業規則」という。）第65条及び独立行政法人国立高等専門学校機構船員就業規則（以下「船員就業規則」という。）第73条の規定に基づき、独立行政法人国立高等専門学校機構（以下「機構」という。）の教職員（教職員就業規則第24条及び船員就業規則第26条の規定により再雇用された教職員を除く。以下同じ。）に対する退職手当の支給に関し、必要な事項を定めることを目的とする。

### (退職手当の支給)

**第2条** この規則による退職手当は、教職員が退職し、又は解雇された場合に、その者（死亡による退職の場合には、その遺族）に支給する。ただし、教職員が次の各号の一に該当する場合には退職手当は支給しない。

- 一 勤続6月未満で退職し、又は解雇された場合（教職員就業規則第20条第四号及び第26条第二号又は船員就業規則第21条第四号及び第27条第二号に規定する場合を除く。）
- 二 教職員就業規則第46条第五号又は船員就業規則第50条第五号の規定により懲戒解雇された場合
- 三 教職員就業規則第25条第二号及び第三号又は船員就業規則第26条第二号及び第三号の規定により解雇された者
- 四 独立行政法人国立高等専門学校機構教職員給与規則第40条第1項の規定の適用を受けた者

2 教職員が退職した場合において、その者が退職の日又はその翌日に再び教職員（教職員就業規則第24条第1項又は船員就業規則第25条第1項の規定により再雇用された教職員を除く。）となったときは、その退職については、退職手当は支給しない。

3 退職し、又は解雇された教職員に対し、退職手当がまだ支払われていない場合において、当該退職し、又は解雇された教職員の基礎在職期間（第5条の2第2項に規定する基礎在職期間をいう。以下同じ。）中の行為に関し、懲戒による解雇を受ける事由その他これに相当すると認められる事由が明らかになったときは、退職手当の全部又は一部を支給しないことができる。

### (退職手当の額)

**第2条の2** 退職した教職員に対する退職手当の額は、次条から第8条の3までの規定により計算した退職手当の基本額に、第8条の4の規定により計算した退職手当の調整額を加えて得た額とする。

### (諭旨解雇の時の退職手当の額)

**第2条の3** 教職員就業規則第46条第四号又は船員就業規則第50条第四号の規定による退職願の提出の勧告に応じた場合の退職手当の支給額は、第2条の2に基づく支給額の3分の2以内の額とする。

2 教職員就業規則第46条第四号又は船員就業規則第50条第四号の規定による退職願の提出を勧告し、これに応じない場合の退職手当の支給額は、第2条の2に基づく支給額の2分の1以内の額とする。

### (普通退職の場合の退職手当)

**第3条** 次条又は第5条の規定に該当する場合を除くほか、退職した者に対する退職手当の基本額は、退職の日におけるその者の本給月額に、その者の勤続期間を次の各号に区分して、当該各号に掲げる割合を乗じて得た額の合計額とする。

- 一 1年以上10年以下の期間については、1年につき100分の100
- 二 11年以上15年以下の期間については、1年につき100分の110
- 三 16年以上20年以下の期間については、1年につき100分の160
- 四 21年以上25年以下の期間については、1年につき100分の200
- 五 26年以上30年以下の期間については、1年につき100分の160
- 六 31年以上の期間については、1年につき100分の120

2 前項に規定する者のうち、負傷若しくは病気（以下「傷病」という。）又は死亡によらず、その者の都合により退職した者に対する退職手当の基本額は、その者が次の各号に掲げる者に該当するときは、同項の規定にかかわらず、同項の規定により計算した額に当該各号に定める割合を乗じて得た額とする。

- 一 勤続期間1年以上10年以下の者 100分の60
- 二 勤続期間11年以上15年以下の者 100分の80
- 三 勤続期間16年以上19年以下の者 100分の90

### (11年以上25年未満勤続後定年退職等の場合の基本額)

**第4条** 11年以上25年未満の期間勤続し教職員就業規則第20条第二号又は船員就業規則第21条第二号の規定により退職した者（教職員就業規則第23条第1項もしくは船員就業規則第24条第1項の期限又は教職員就業規則第23条第2項、第3項もしくは船員就業規則第24条第2項、第3項の規定により延長された期限の到来により退職した者を含む）、もしくは11年以上25年未満の期間勤続し勸奨により退職した者、11年以上25年未満の期間勤続し教職員就業規則第20条第五号又は船員就業規則第

21条第五号の規定により退職した者、教職員就業規則第26条第三号又は船員就業規則第27条第三号の規定により退職した者に対する退職手当の基本額は、退職の日におけるその者の本給月額（以下、「退職日本給月額」という。）に、その者の勤続期間を次の各号に区分して、当該各号に掲げる割合を乗じて得た額の合計額とする。

- 一 1年以上10年以下の期間については、1年につき100分の125
- 二 11年以上15年以下の期間については、1年につき100分の137.5
- 三 16年以上24年以下の期間については、1年につき100分の200

2 前項の規定は、11年以上25年未満の期間勤続し通勤（労働者災害補償保険法（昭和22年法律第50号）第7条第2項に規定する通勤をいう。以下同じ。）による傷病により退職した者、11年以上25年未満の期間勤続し死亡（業務上の事由による死亡を除く。）により退職した者又は11年以上25年未満の期間勤続し定年に達した日以後その者の非違によることなく退職した者（前項の規定に該当する者を除く。）に対する退職手当の基本額について準用する。

#### （定年退職等の場合の退職手当）

**第5条** 25年以上勤続し教職員就業規則第20条第二号又は船員就業規則第21条第二号の規定により退職した者（教職員就業規則第23条第1項もしくは船員就業規則第24条第1項の期限又は教職員就業規則第23条第2項、第3項もしくは船員就業規則第24条第2項、第3項の規定により延長された期限の到来により退職した者を含む）、もしくは25年以上勤続し勸奨により退職した者、25年以上勤続し教職員就業規則第20条第五号又は船員就業規則第21条第五号の規定により退職した者、業務上の事由による傷病若しくは死亡により退職した者、教職員就業規則第26条第三号又は船員就業規則第27条第三号の規定により退職した者で理事長が特に認める事由によるものに対する退職手当の基本額は、退職日本給月額に、その者の勤続期間を次の各号に区分して、当該各号に掲げる割合を乗じて得た額の合計額とする。

- 一 1年以上10年以下の期間については、1年につき100分の150
- 二 11年以上25年以下の期間については、1年につき100分の165
- 三 26年以上34年以下の期間については、1年につき100分の180
- 四 35年以上の期間については、1年につき100分の105

2 前項の規定は、25年以上勤続し通勤による傷病により退職した者、25年以上勤続し死亡により退職した者又は25年以上勤続し定年に達した日以後その者の非違によることなく退職した者（前項の規定に該当する者を除く。）に対する退職手当の基本額について準用する。

#### （本給月額の減給改定以外の理由により本給月額が減額されたことがある場合の退職手当の基本額に係る特例）

**第5条の2** 退職した者の基礎在職期間中に、本給月額の減額改定（本給月額を改定する給与規則が施行された場合、又はこれに準ずる給与細則もしくは給与の支給の基準が定められた場合において、当該規則又は給与細則もしくは給与の支給基準による改定により当該改定前に受けていた本給月額が減額される場合をいう。以下同じ。）以外の理由

によりその者の本給月額が減額された事がある場合において、当該理由が生じた日（以下「減額日」という。）における当該理由により減額されなかったものとした場合のその者の本給月額のうち最も多いもの（以下「特定減額前本給月額」という。）が、退職日本給月額より多いときは、その者に対する退職手当の基本額は、前3条の規定にかかわらず、次の各号に掲げる額の合計額とする。

一 その者が特定減額前本給月額に係る減額日のうち最も遅い日の前日に現に退職した理由と同一の理由により退職したものとし、かつ、その者の同日までの勤続期間及び特定減額前本給月額を基礎として、前3条の規定により計算した場合の退職手当の基本額に相当する額

二 退職日本給月額に、イに掲げる割合からロに掲げる割合を控除した割合を乗じて得た額

イ その者に対する退職手当の基本額が前3条の規定により計算した額であるものとした場合における当該退職手当の基本額の退職日本給月額に対する割合

ロ 前号に掲げる額の特定減額前本給月額に対する割合

2 前項の「基礎在職期間」とは、その者に係る退職（この規則その他規則の規定、又は法令により退職手当を支給しないこととしている退職を除く。）の日以前の期間のうち、次の各号に掲げる在職期間に該当するもの（当該期間中にこの規則の規定による退職手当の支給を受けたこと又は第10条第1項に規定する国家公務員等若しくは第11条第1項に規定する国立大学法人等の教職員として退職したことにより退職手当（これに相当する給付を含む。）の支給を受けたことがある場合におけるこれらの支給に係る退職の日以前の期間及び第2条第1項第二号、第三号及び同条第3項に掲げる者又はこれに準ずる者に該当する至ったことにより退職したことがある場合における当該退職の日以前の期間（これらの退職の日に教職員、国家公務員等又は国立大学法人等の教職員となつたときは、当該退職の日前の期間）を除く。）をいう。

一 教職員としての引き続いた在職期間

二 第10条第1項の規定により再び教職員となつた者の同項に規定する国家公務員等として引き続いた在職期間

三 第10条第2項に規定する再び教職員となつた者の同項に規定する国家公務員等としての引き続いた在職期間

四 第11条第2項の規定により教職員として引き続いた在職期間に含むものとされた他の国立大学法人等の職員として引き続いた在職期間

五 第12条第2項に規定する場合における役員としての引き続いた在職期間

六 その他前各号に掲げる期間に準ずるものとして理事長が定める在職期間

#### （定年前早期退職者に対する退職手当の基本額に係る特例）

**第6条** 第5条第1項に規定する者のうち、定年に達する日から別に定める一定の期間前までに退職した者であつて、その勤続期間が25年以上であり、かつ、その年齢が別に定める年齢以上であるものに対する同項及び前条第1項の規定の適用については、次の表の左欄に掲げる規定中の同表の中欄に掲げる字句は、それぞれ同表の右欄に掲げる字句に読み替えるものとする。

読み替える規定	読み替えられる字句	読み替える字句
第5条第1項	退職日本給月額	退職日本給月額及び退職日本給月額に退職の日において定められているその者に係る定年と退職の日におけるその者の年齢との差に相当する年数1年につき退職日本給月額に応じて100分の2を乗じた合計額
第5条の2第1項第一号	及び特定減額前本給月額	並びに特定減額前本給月額及び特定減額前本給月額に退職の日において定められているその者に係る定年と退職の日におけるその者の年齢との差に相当する年数1年につき特定減額前本給月額に応じて100分の2を乗じて得た額の合計額
第5条の2第1項第二号	退職日本給月額に、	退職日本給月額及び退職日本給月額に退職の日において定められているその者に係る定年と退職の日におけるその者の年齢との差に相当する年数1年につき特定減額前本給月額に応じて100分の2を乗じて得た額の合計額に、
第5条の2第1項第二号ロ	前号に掲げる額	その者が特定減額前本給月額に係る減額日のうち最も遅い日の前日に現に退職した理由と同一の理由により退職したものとし、かつ、その者の同日までの勤続期間及び特定減額前本給月額を基礎として、前3条の規定により計算した場合の退職手当の基本額に相当する額

#### (退職手当支給率の調整)

- 第7条** 20年以上35年以下の期間勤続して退職した者（傷病又は死亡によらず、その者の都合により退職した者を除く。）に対する退職手当の基本額は、当分の間、第3条から第6条までの規定により計算した額に100分の104を乗じて得た額とする。
- 2 36年の期間勤続して退職した者で第3条第1項の規定に該当する退職をしたもの（傷病又は死亡によらず、その者の都合により退職した者を除く。）に対する退職手当の基本額は、当分の間、その者の勤続期間を35年として前項の規定の例により計算して得られる額とする。
- 3 35年を超える期間勤続して退職した者で第5条の規定に該当する退職をした者に対する退職手当の基本額は、当分の間、その者の勤続期間を35年として第1項の規定の例により計算して得られた額とする。

**(退職手当の最高限度額)**

**第8条** 第3条から第5条までの規定により計算した退職手当の基本額が、退職日本給月額に60を乗じて得た額を超えるときは、これらの規定にかかわらず、その乗じて得た額をその者の退職手当の基本額とする。

**第8条の2** 第5条の2第1項の規定により計算した退職手当の基本額が次の各号に掲げる同項第二号ロに掲げる割合の区分に応じ当該各号に定める額を超えるときは、同項の規定にかかわらず、当該各号に定める額をその者の退職手当の基本額とする。

- 一 60以上 特定減額前本給月額に60を乗じて得た額
- 二 60未満 特定減額前本給月額に第5条の2第1項第二号ロに掲げる割合を乗じて得た額及び退職日本給月額に60から当該割合を控除した割合を乗じて得た額の合計額

**第8条の3** 第6条に規定する者に対する前2条の規定の適用については、次の表の上欄に掲げる規定中同表の中欄に掲げる字句は、それぞれ同表の下欄に掲げる字句に読み替えるものとする。

読み替える規定	読み替えられる字句	読み替える字句
第8条	第3条から第5条まで	前条の規定により読み替えて適用する第5条
	退職日本給月額	退職日本給月額及び退職日本給月額に退職の日において定められているその者に係る定年と退職の日におけるその者の年齢との差に相当する年数一年につき退職日本給月額に応じて100分の2を乗じて得た額の合計額
	これらの	前条の規定により読み替えて適用する第5条の
第8条の2	第5条の2第1項の	第6条の規定により読み替えて適用する第5条の2第1項の
	同項第二号ロ	第6条の規定により読み替えて適用する同項第二号ロ
	同項の	同条の規定により読み替えて適用する同項の
第8条の2第一号	特定減額前本給月額	特定減額前本給月額及び特定号減額前本給月額に退職の日において定められているその者に係る定年と退職の日におけるその者の年齢との差に相当する年数一年につき特定減額前本給月額に応じて10

		0分の2を乗じて得た額の合計額
第8条の2第二号	特定減額前本給月額	特定減額前本給月額及び特定号減額前本給月額に退職の日において定められているその者に係る定年と退職の日におけるその者の年齢との差に相当する年数一年につき特定減額前本給月額に応じて100分の2を乗じて得た額の合計額
	第5条の2第1項第二号ロ	第6条の規定により読み替えて適用する第5条の2第1項第二号ロ
	及び退職日本給月額	並びに退職日本給月額及び退職日本給月額に退職の日において定められているその者に係る定年と退職の日におけるその者の年齢との差に相当する年数一年につき特定減額前本給月額に応じて100分の2を乗じて得た額の合計額
	当該割合	当該第6条の規定により読み替えて適用する同号ロに掲げる割合

#### (退職手当の調整額)

**第8条の4** 退職した者に対する退職手当の調整額は、その者の基礎在職期間の初日の属する月からその者の基礎在職期間の末日の属する月までの各月ごとに当該各月にその者が属していた別表第1に掲げる教職員の区分に応じて当該別表第1に定める額(以下「調整月額」という。)のうちその額が最も多いものから順次その順位を付し、その第1順位から第60順位までの調整月額(当該各月の月数が60月に満たない場合には、当該各月の調整月額)を合計した額とする。この場合において、別表第1に掲げる各教職員の区分は、職種の職制上の段階、職務の級、その他職員の職務の複雑、困難及び責任の度に関する事項を考慮して、定めるものとする。

2 退職した者の基礎在職期間の各月に教職員就業規則第16条又は船員就業規則第17条の規定による休職(業務上の事由による傷病又は通勤による傷病による休職を除く。)の期間若しくは教職員就業規則第46条第三号又は船員就業規則第50条第三号の規定による停職の期間若しくは独立行政法人国立高等専門学校機構教職員の育児休業等に関する規則により育児休業をした期間、独立行政法人国立高等専門学校機構教職員の介護休業等に関する規則により介護休業をした期間又は独立行政法人国立高等専門学校機構教職員の自己啓発等休業に関する規則により自己啓発等休業をした期間のある月(現実に職務を取ることがを要する日のあった月を除く。以下「休職月等」という。)があるときは、次の各号に定める月数を前項に規定する退職手当の調整額の算定対象から除く。

一 独立行政法人国立高等専門学校機構教職員の育児休業等に関する規則による育児休業により現実に職務を取ることがを要しない期間(当該育児休業に係る子が1歳に達した日の属する月までの期間に限る。)又は独立行政法人国立高等専門学校機構教職員の介護休業等に関する規則により介護休業をした期間のあった休職月等 退職した者

が属していた別表第1に掲げる教職員の区分が同一である休職月等がある休職月等にあつては教職員の区分が同一である休職月等ごとにそれぞれその最初の休職月等から順次数えてその月数の3分の1に相当する数（当該相当する数に1未満の端数があるときは、これを切り上げた数）になるまでにある休職月等、退職した者が属していた教職員の区分が同一である休職月数等がない休職月数等にあつては当該休職月等

二 前号に規定する事由以外の事由により現実に職務をとることを要しない期間のあつた休職月等（前号に規定する現実に職務をとることを要しない期間のあつた休職月等を除く。） 退職した者が属していた教職員の区分が同一の休職月等がある休職月等にあつては教職員の区分が同一の休職月等ごとにそれぞれその最初の休職月等から順次に数えてその月数の2分の1に相当する数（当該相当する数に1未満の端数があるときは、これを切り上げた数）になるまでにある休職月等、退職した者が属していた職員の区分が同一の休職月等がない休職月等にあつては当該休職月等

3 退職した者の基礎在職期間に第5条の2第2項第二号から第六号までに掲げる期間（以下「特定基礎在職期間」という。）が含まれる場合における本条の規定の適用については、その者は、次の各号に掲げる特定基礎在職期間において当該各号に定める教職員として在職していた者とみなす。

一 教職員としての引き続いた在職期間（その者の基礎在職期間に含まれる期間に限る。）に連続する特定基礎在職期間 当該教職員としての引き続いた在職期間の末日にその者が従事していた職務と同種の職務に従事する教職員又は当該特定基礎在職期間に連続する教職員としての引き続いた在職期間の初日にその者が従事していた職務と同種の職務に従事する教職員

二 前号に掲げる特定基礎在職期間以外の特定基礎在職期間 当該特定基礎在職期間に連続する教職員としての引き続いた在職期間の初日にその者が従事していた職務と同種の職務に従事する教職員

4 退職した者は、その者の基礎在職期間の初日の属する月からその者の基礎在職期間の末日の属する月までの各月ごとに別表第一に掲げるその者の当該各月における区分に対応する教職員の区分に属していたものとする。この場合において、その者が同一の月において当該表の2以上の区分に該当していたときは、その者は、当該月において、これらの区分のそれぞれに対応する教職員の区分に属していたものとする。

5 次の各号に掲げる者に対する退職手当の調整額は、第1項の規定にかかわらず、当該各号に定める額とする。

一 退職した者でその勤続期間が24年以下のもの（次号に掲げる者を除く。） 別表第1の第1号から第9号まで又は第11号に掲げる職員の区分にあつては当該各号に定める額、同項第10号に掲げる職員の区分にあつては0円として、第1項の規定を適用して計算した額

二 退職した者でその勤続期間が4年以下のもの及び第3条第2項に規定する傷病又は死亡によらずにその者の都合により退職した者に該当する者でその勤続期間が10年以上24年以下のもの 前号の規定により計算した額の2分の1に相当する額

6 第4項（第3項の規定により見なして適用する場合を含む。）後段の規定により退職

した者が同一の月において2以上の教職員の区分に属していたこととなる場合には、その者は、当該月において、当該教職員の区分のうち、調整月額が最も高い額となる教職員の区分のみに属していたものとする。

- 7 調整月額のうちその額が等しいものがある場合には、その者の基礎在職期間の末日の属する月に近い月に係るものを先順位とする。
- 8 本条の規定により計算した退職手当の調整額に相当する部分は、次の各号のいずれかに該当する者には、支給しない。
  - 一 第3条第1項及び第5条の2の規定により計算した退職手当の基本額が0円である者並びに第3条第2項に規定する傷病又は死亡によらずにその者の都合により退職した者に該当する者でその勤続期間が9年以下のもの
  - 二 その者の非違により退職した者で、退職の日から起算して3月前までに当該非違を原因として教職員就業規則第46条又は船員就業規則第50条の規定による懲戒（懲戒解雇を除く）を受けたもの。

#### （退職手当の額に係る特例）

**第8条の5** 第5条第1項に規定する者で次の各号に掲げる者に該当するものに対する退職手当の額が退職の日におけるその者の基本給月額に当該各号に定める割合を乗じて得た額に満たないときは、第2条の2、第5条、第5条の2及び前条の規定にかかわらず、その乗じて得た額をその者の退職手当の額とする。

- 一 勤続期間1年未満の者 100分の270
- 二 勤続期間1年以上2年未満の者 100分の360
- 三 勤続期間2年以上3年未満の者 100分の450
- 四 勤続期間3年以上の者 100分の540

- 2 前項の「基本給月額」とは、独立行政法人国立高等専門学校機構教職員給与規則に規定する基本給及び扶養手当の月額並びに地域手当の月額の合計額をいう。

#### （勤続期間の計算）

**第9条** 退職手当の算定の基礎となる勤続期間の計算は、教職員としての引き続いた在職期間による。

- 2 前項の規定による在職期間の計算は、教職員となった日の属する月から、退職し、又は解雇された日の属する月までの月数による。
- 3 前2項の規定による在職期間のうち休職月等が1以上あったときは、それらの期間の2分の1に相当する期間（独立行政法人国立高等専門学校機構教職員の育児休業に関する規則により育児休業をした期間（当該育児休業に係る子が1歳に達した日の属する月までの期間に限る。）にあってはその期間の3分の1に相当する期間）（1月未満の端数があるときは、これを切り捨てる。）を前2項の規定により計算して得た在職期間から除算する。
- 4 前各項の規定により計算した在職期間に1年未満の端数がある場合には、その端数は、切り捨てる。ただし、その在職期間が6月以上1年未満（第3条第1項（傷病又は死亡による退職に係る部分に限る。）、第4条第1項又は第5条第1項の規定により退職手

当の基本額を計算する場合にあっては、1年未満)の場合には、これを1年とする。

- 5 第2条第1項第一号に規定する場合の勤続期間については、前項の規定にかかわらず、その者が教職員となった日から退職した日の前日までの全月数による。
- 6 第4項の規定は、前条の規定により退職手当の額を計算する場合における勤続期間の計算については、適用しない。

#### (国家公務員等として在職した後引き続き教職員となった者に対する退職手当に係る特例)

**第10条** 教職員のうち、理事長の要請に応じ、引き続き国若しくは特定独立行政法人(独立行政法人通則法第2条第2項に規定する特定独立行政法人をいう。以下同じ。)

若しくは、地方公共団体(退職手当に関する条例において、教職員が理事長の要請に応じ、引き続き当該地方公共団体に使用される者となった場合に、教職員としての在職期間を当該地方公共団体に使用される者としての在職期間に通算されることと定めている地方公共団体に限る。)又は国家公務員退職手当法(昭和28年法律第182号)第7条の2第1項に規定する公庫等(第11条に定める法人を除く。以下「国等の機関」という。)に使用される者(以下「国家公務員等」という。)となるため退職をし、かつ、引き続き国家公務員等として在職(その者が更に引き続き当該国家公務員等以外の他の国等の機関に係る国家公務員等として在職した場合を含む。)した後引き続き再び教職員となった者の前条第1項の規定による在職期間の計算については、先の教職員としての在職期間の始期から後の教職員としての在職期間の終期までの期間は、教職員としての引き続きいた在職期間とみなす。

- 2 国家公務員等が、国等の機関の要請に応じ、引き続き教職員となるため退職し、かつ、引き続き教職員となった場合におけるその者の前条第1項に規定する教職員としての引き続きいた在職期間には、その者の国家公務員等としての引き続きいた在職期間を含むものとする。
- 3 前2項の場合における国家公務員等としての在職期間の計算については、前条の規定を準用する。
- 4 教職員が第1項の規定に該当する退職をし、かつ、引き続き国家公務員等となった場合又は第2項の規定に該当する教職員が退職し、かつ、引き続き国家公務員等となった場合においては、この規定による退職手当は支給しない。
- 5 教職員を国家公務員退職手当法施行令(昭和28年政令第215号)第6条に掲げる法人の業務に従事させるための休職の期間は、第9条第3項の規定に関わらず教職員の引き続きいた在職期間に全期間算入するものとする。
- 6 国家公務員等がその身分を保有したまま引き続き教職員となった場合におけるその者の前条第1項の規定による在職期間の計算については、教職員としての在職期間はなかったものとみなす。ただし、理事長が別に定める場合においては、この限りではない。

#### (他の国立大学法人等の職員との在職期間の通算)

**第11条** 教職員が引き続き他の国立大学法人、大学共同利用機関法人、独立行政法人大学評価・学位授与機構、独立行政法人国立大学財務・経営センター、独立行政法人メ

ディア教育開発センター及び独立行政法人宇宙航空研究開発機構（同機構就業規則に規定する教育職職員に限る。）（以下「他の国立大学法人等」という。）の職員となり、その者の職員としての在職期間が、当該他の国立大学法人等の退職手当（これに相当する給付を含む）に関する規定によりその者の当該他の国立大学法人等における職員としての在職期間に通算されることと定められているときは、この規則による退職手当は、支給しない。

- 2 第9条第1項に規定する教職員としての引き続いた在職期間には、他の国立大学法人等の役職員が引き続いて教職員となったときにおけるその者の他の国立大学法人等の役職員としての引き続いた在職期間を含むものとする。

#### （役員との在職期間の通算）

**第12条** 教職員が、引き続いて役員（常時勤務に服することを要しない者を除く。以下同じ。）となったときは、この規則による退職手当は、支給しない。

- 2 第9条に規定する教職員としての引き続いた在職期間には、役員が引き続いて教職員となったときにおけるその者の役員としての引き続いた在職期間を含むものとする。
- 3 前項の場合における役員としての在職期間の計算については、第9条の規定を準用する。

#### （役員との在職期間を有する職員の退職手当の額の特例）

**第13条** 引き続いた役員との期間を有する教職員の退職手当の額は第3条から第8条の5までの規定にかかわらず、当該教職員に係る役員との在職期間について、当該役員との業績に応じ、これを増額し又は減額することができる。

#### （遺族の範囲及び順位）

**第14条** 第2条に規定する遺族は、次の各号に掲げる者とする。

- 一 配偶者（婚姻の届出をしないが、教職員の死亡当時事実上婚姻関係と同様の事情にあった者を含む。）
  - 二 子、父母、孫、祖父母及び兄弟姉妹で教職員の死亡当時主としてその収入によって生計を維持していたもの
  - 三 前号に掲げる者のほか、教職員の死亡当時主としてその収入によって生計を維持していた親族
  - 四 子、父母、孫、祖父母及び兄弟姉妹で第二号に該当しないもの
- 2 前項に掲げる者が退職手当を受ける順位は、前項各号の順位により、第二号及び第四号に掲げる者のうちあっては、同号に掲げる順位による。この場合において、父母については、養父母を先にし実父母を後にし、祖父母については、養父母の父母を先にし実父母の父母を後にし、父母の養父母を先にし父母の実父母を後にする。
  - 3 退職手当の支給を受けるべき同順位の者が2人以上ある場合には、その人数によって等分して支給する。

#### （遺族からの排除）

**第15条** 次に掲げる者は、退職手当の支給を受けることができる遺族としない。

- 一 教職員を故意に死亡させた者
- 二 教職員の死亡前に、当該教職員の死亡によって退職手当の支給を受けることができる先順位又は同順位の遺族となるべき者を故意に死亡させた者

**(起訴中に退職又は解雇された場合の退職手当の取扱い)**

**第16条** 教職員が刑事事件に関し起訴（当該起訴に係る犯罪について禁錮以上の刑が定められているものに限り、刑事訴訟法（昭和23年法律第131号）第6編に規定する略式手続によるものを除く。第2項及び第15条第2項において同じ。）された場合において、その判決の確定前に退職し又は解雇されたときは、退職手当は、支給しない。ただし、判決の確定によって禁錮以上の刑に処せられなかったときは、この限りでない。

2 前項の規定は、退職した者に対しまだ退職手当が支払われていない場合において、その者が基礎在職期間中の行為に係る刑事事件に関し起訴をされたときについて準用する。

**(退職手当の支払)**

**第17条** この規則の規定による退職手当は、他の法令に別段の定めがある場合を除き、その全額を、現金で、直接この規則の規定によりその支給を受けるべき者に支払わなければならない。ただし、別に定める確実な方法により支払う場合は、この限りでない。

2 この規則の規定による退職手当は、教職員が退職した日から起算して1月以内に支払わなければならない。ただし、死亡により退職した者に対する退職手当の支給を受けるべき者を確認することができない場合その他特別の事情がある場合は、この限りでない。

**(退職手当の返納)**

**第18条** 退職手当の支給をした後において、退職した者が基礎在職期間中の行為に係る刑事事件に関し禁錮以上の刑に処せられたとき、若しくは基礎在職期間中の行為に関し懲戒による解雇を受ける事由その他これに相当すると認められる事由が明らかになったときは、理事長は、退職手当を支給された者（相続人を含む。）に対し、その支給をした退職手当の全部又は一部を返納させることができる。

2 前項の規定により返納させるべき退職手当の額の範囲、返納の手続その他返納に関し必要な事項は、別に定める。

**(解雇された者の取扱い)**

**第19条** 教職員就業規則第25条、第26条及び第46条又は船員就業規則第26条、第27条及び第50条の規定により解雇された教職員の退職手当については、前条までの規定に準じて取り扱う。

**(雑則)**

**第20条** この規則の実施のための手続その他その執行について必要な事項は、理事長が別に定める。

## 附 則（平成16年4月1日制定）

### （施行期日）

- 1 この規則は、平成16年4月1日から施行する。

### （経過措置）

- 2 独立行政法人国立高等専門学校機構法（平成15年法律第113号）（以下「機構法」という。）附則第3条の規定により機構の教職員になった者の退職に際し、退職手当を支給しようとするときは、その者の国家公務員退職手当法（昭和28年法律第182号）第2条に規定する職員（職員とみなされる者を含む。）として引き続いた在職期間を機構の教職員としての在職期間とみなす。
- 3 前項の教職員が退職し、かつ、引き続いて国家公務員退職手当法第2条第1項に規定する職員となった場合においては、この規定による退職手当は、支給しない。
- 4 機構の成立前の国立高等専門学校（以下「旧機関」という。）の職員が、任命権者の要請に応じ、引き続いて地方公共団体又は国家公務員退職手当法第7条の2第1項に定める公庫等（以下「公庫等」という。）の職員となるため退職し、かつ、引き続き公庫等の職員として在職した後引き続いて職員となった場合におけるその者の第9条第1項に規定する教職員としての引き続いた在職期間の計算については、その者の国家公務員退職手当法第2条第1項に定める職員としての引き続いた在職期間の始期から職員としての引き続いた在職期間の終期までの期間は、教職員としての引き続いた在職期間とみなす。
- 5 公庫等の職員が、公庫等の要請に応じ、引き続いて旧機関の職員となり、かつ、引き続き旧機関の職員として在職した後引き続いて機構法附則第3条の規定により職員となり、かつ、引き続いて公庫等の職員となるため退職した場合において、その者の職員としての在職期間が、当該公庫等における在職期間に通算されることに定められているときは、この規定による退職手当は、支給しない。
- 6 機構法附則第5条第4項に規定する退職があった場合は、同項の定めるところにより、退職手当を支給する。
- 7 平成16年4月1日から平成16年9月30日までの間におけるこの規則の適用については、第7条第1項中「当分の間」とあるのは「当分の間、次条の規定にかかわらず」と、「100分の104」とあるのは「100分の107」と、同条第2項中「36年」とあるのは「35年を超え37年以下」とする。
- 8 退職した者の基礎在職期間中に本給月額が減額改定（平成18年3月31日以前に行われたものを除く。）によりその者の本給月額が減額されたことがある場合において、その者の減額後の本給月額が減額前の本給月額に達しない場合にその差額に相当する額を支給することとする給与準則若しくは給与の支給の基準の適用を受けたことがあるときは、この規則の規定による本給月額には、当該差額を含まないものとする。

## 附 則（平成18年4月4日一部改正）

### （施行期日）

**第1条** この規則は、平成18年4月1日から施行する。

### （経過措置）

**第2条** 教職員が新制度適用教職員（教職員であつて、その者が新制度切替日以後に退職することにより改正後の独立行政法人国立高等専門学校機構教職員退職手当規則（以下、「新規則」という。）の規定による退職手当の支給を受ける事となる者をいう。以下同じ。）として退職した場合において、その者が新制度切替日の前日に現に退職した理由と同一の理由により退職したものとし、かつその者の同日までの勤続期間及び同日における本給月額を基礎として、改正前の独立行政法人国立高等専門学校機構教職員退職手当規則（以下、「旧規則」という。）第3条から第8条までの規定で計算した退職手当の額が、新規則第2条の3から第8条の5までの規定により計算した退職手当の額（以下、「新規則退職手当額」という。）よりも多いときは、これらの規定にかかわらず、その多い額をもってその者に支給すべきこれらの規定による退職手当の額とする。

2 前項の「新制度切替日」とは、次の各号に掲げる教職員の区分に応じ、当該各号に定める日をいう。

- 一 施行日の前日及び施行日において教職員として在職していた者 施行日
- 二 教職員として在職した後、施行日以後に引き続いて新規則第10条第1項に規定する国家公務員等もしくは独立行政法人国立高等専門学校機構の役員又は新規則第11条第1項に規定する国立大学法人等の教職員となった者で、国家公務員等若しくは独立行政法人国立高等専門学校機構の役員又は国立大学法人等の教職員となった日前の期間に、新制度適用教職員としての在職期間が含まれない者に限る。）  
当該国家公務員等若しくは独立行政法人国立高等専門学校機構の役員又は国立大学法人等の教職員となった日
- 三 施行日の前日に国家公務員等若しくは独立行政法人国立高等専門学校機構の役員又は国立大学法人等の教職員として在職していた者のうち教職員から引き続いて国家公務員等若しくは独立行政法人国立高等専門学校機構の役員又は国立大学法人等の教職員として在職した後引き続いて教職員となった者 施行日

3 前項第三号に掲げる者が新制度適用教職員として退職した場合における当該退職による退職手当についての第二項の規定の適用については、同項中「退職したものとし」とあるのは「教職員として退職したものとし」と、「勤続期間」とあるのは「勤続期間として取り扱われるべき期間」と、「本給月額」とあるのは「本給月額に相当する額」とする。

**第3条** 教職員が新制度切替日（前条第2項に規定する新制度切替日をいう。以下同じ。）以後平成21年3月31日までの間に新制度適用教職員として退職した場合において、その者についての新規則退職手当額がその者が新制度切替日の前日に受けていた本給月

額を退職の日の本給月額とみなして、旧規則第3条から第8条までの規定により計算した退職手当の額（以下「旧規則退職手当額」という。）よりも多いときは、これらの規定にかかわらず、新規則退職手当額から次の各号に掲げる退職した者の区分に応じ当該各号に定める額を控除した額をもってその者に支給すべき退職手当の額とする。

一 退職した者でその勤続期間が25年以上のもの 次に掲げる額のうちいずれか少ない額（その少ない額が10万円を超える場合には、10万円）

イ 新規則第8条の4の規定により計算した退職手当の調整額の100分の5に相当する額

ロ 新規則退職手当額から旧規則退職手当額を控除した額

二 新制度切替日以後平成19年3月31日までの間に退職した者でその勤続期間が24年以下のもの 次に掲げる額のうちいずれか少ない額（その少ない額が100万円を超える場合には、100万円）

イ 新規則第8条の4の規定により計算した退職手当の調整額の100分の70に相当する額

ロ 新規則退職手当額から旧規則退職手当額を控除した額

三 平成19年4月1日以後平成21年3月31日までの間に退職した者でその勤続期間が24年以下のもの 次に掲げる額のうちいずれか少ない額（その少ない額が50万円を超える場合には、50万円）

イ 新規則第8条の4の規定により計算した退職手当の調整額の100分の30に相当する額

ロ 新規則退職手当額から旧規則退職手当額を控除した額

2 第2条第2項第三号に掲げる者が新制度適用教職員として退職した場合における当該退職による退職手当についての前項の規定の適用については、同項中「受けていた本給月額」とあるのは「受けていた本給月額に相当する額」とする。

**第4条** 基礎在職期間の初日が新制度切替日前である者に対する新規則第5条の2の規定の適用については、同項第1項中「基礎在職期間」とあるのは「基礎在職期間（新規則附則第2条第2項に規定する新制度切替日以後の期間に限る。）」とする。

2 新制度適用教職員として退職した者で、その者の基礎在職期間のうち新制度切替日以降の期間に、新制度適用教職員以外の教職員として在職期間が含まれるものに対する新規則第5条の2の規定の適用については、その者が新制度適用教職員以外の教職員として受けた本給月額は、同条第1項に規定する本給月額には該当しないものとみなす。

**第5条** 新規則第8条の4の規定により退職手当の調整額を計算する場合において、基礎在職期間の初日が平成8年4月1日前である者に対する同条の規定の適用については、同条第1項中「その者の基礎在職期間（）」とあるのは「平成8年4月1日以後のその者の在職期間（）」と、同条第2項中「基礎在職期間」とあるのは「平成8年4月1日以降の基礎在職期間」と読み替えるものとする。

**附 則（平成19年3月30日一部改正）**

この規則は、平成19年4月1日から施行する。

**附 則（平成21年3月24日一部改正）**

- 1 この規則は、平成21年4月1日から施行する。
- 2 施行日の前日までに支給された退職手当の支給及び返納の取扱いについては、なお従前の例による。

**附 則（平成21年6月1日一部改正）**

この規則は、平成21年6月1日から施行する。

区分	調整額 (1月分)	一般職員(一)	一般職員(二)			教育職員			海事職員(一)			海事職員(二)			医療職員(一)			医療職員(二)			指定職員		
		級	級	適用範囲	役職加算	級	適用範囲	役職加算	級	適用範囲	役職加算	級	適用範囲	役職加算	級	適用範囲	役職加算	級	適用範囲	役職加算	級	適用範囲	役職加算
1	79,200円																						
2	62,500円																				4以上 6以下		
3	54,150円																				3以下		
4	50,000円	11				(5)	校長	(20)	(7)	I種	20												
5	45,850円	10				(4)	教務主事等	(20)	(7)	上記以外の者	20												
6	41,700円	9				(4)	役職加算15%のうち 学科長・専攻科長の者	(15)	(6)	II種以上	15			8		15	7						15
7	33,350円	8				(4)	上記以外の者	(15)	(6)	上記以外の者	15			7及び6		15	6						15
8	25,000円	7	(6)	総括的業務を行う長	10	(3)	役職加算10%のうち 学生もしくは寮務主事の者	(10)	5		10	(6)	—	10	(5)	IV種以上	10	5					10
9	20,850円	6	(5)	上記以外の者	10	(3)	上記以外の者	(10)	4		10	(6)	上記以外の者	10	(5)	上記以外の者	10	4					10
10	16,700円 (勤続25年以上)	5 4	5 4		5 5 5	(2)	役職加算5%	(5)	3		5	5 4		5 5	4 3		5 5	3					5
			(3)	在職期間が120月を 越える者	(5)											(2)	—	(5)	(2)	在職期間が 360月を越える者	(5)		
11	0	3 2 1	(3)	上記以外の者	(5)	(2)	上記以外の者		2			3 2 1			(2)	上記以外の者	(5)	(2)	上記以外の者	(5)			
			2 1				(1)			1						1			1				

平成18年4月以降

区分	調整額 (1月分)	一般職員(一)	一般職員(二)			教育職員			海事職員(一)			海事職員(二)			医療職員(一) (栄養士)			医療職員(二) (看護師等)			指定職員		
		級	級	適用範囲	役職加算	級	適用範囲	役職加算	級	適用範囲	役職加算	級	適用範囲	役職加算	級	適用範囲	役職加算	級	適用範囲	役職加算	級	適用範囲	役職加算
1	79,200円																						
2	62,500円																						
3	54,150円	10																					
4	50,000円	9				(5)	校長	(20)	(7)	I種	20												
5	45,850円	8				(4)	教務主事等	(20)	(7)	上記以外の者	20												
6	41,700円	7				(4)	役職加算15%のうち学科長・専攻科長の者	(15)	(6)	II種以上	15				8		15	7					15
7	33,350円	6				(4)	上記以外の者	(15)	(6)	上記以外の者	15				7及び6		15	6					15
8	25,000円	5	(5)	総括的業務を行う長	10	(3)	役職加算10%のうち学生もしくは寮務主事の者	(10)	5		10	(6)	—	10	(5)	IV種以上	10	5					10
9	20,850円	4	(5)	上記以外の者	10	(3)	上記以外の者	(10)	4		10	(6)	上記以外の者	10	(5)	上記以外の者	10	4					10
10	16,700円 (勤続25年以上)	3	4		5				3		5	5		5	4		5	3					5
			(3)	在職期間が120月を越える者	(5)	(2)	役職加算5%	(5)					5	4		5	(2)	—	(5)	(2)	在職期間が360月を越える者	(5)	
11	0	2	(3)	上記以外の者	(5)	(2)	上記以外の者		2			3			(2)	上記以外の者	(5)	(2)	上記以外の者	(5)			
			2			(1)				1			2			1			1				